

知多半島ケーブルネットワークコミュニティ誌 [ココナッツクラブ]

COCONUTS CLUB

July 7
2021

電^で纜^ん管^{かん}ハウスを知っていますか？



でんらんかん 電纜管ハウスを 知っていますか？

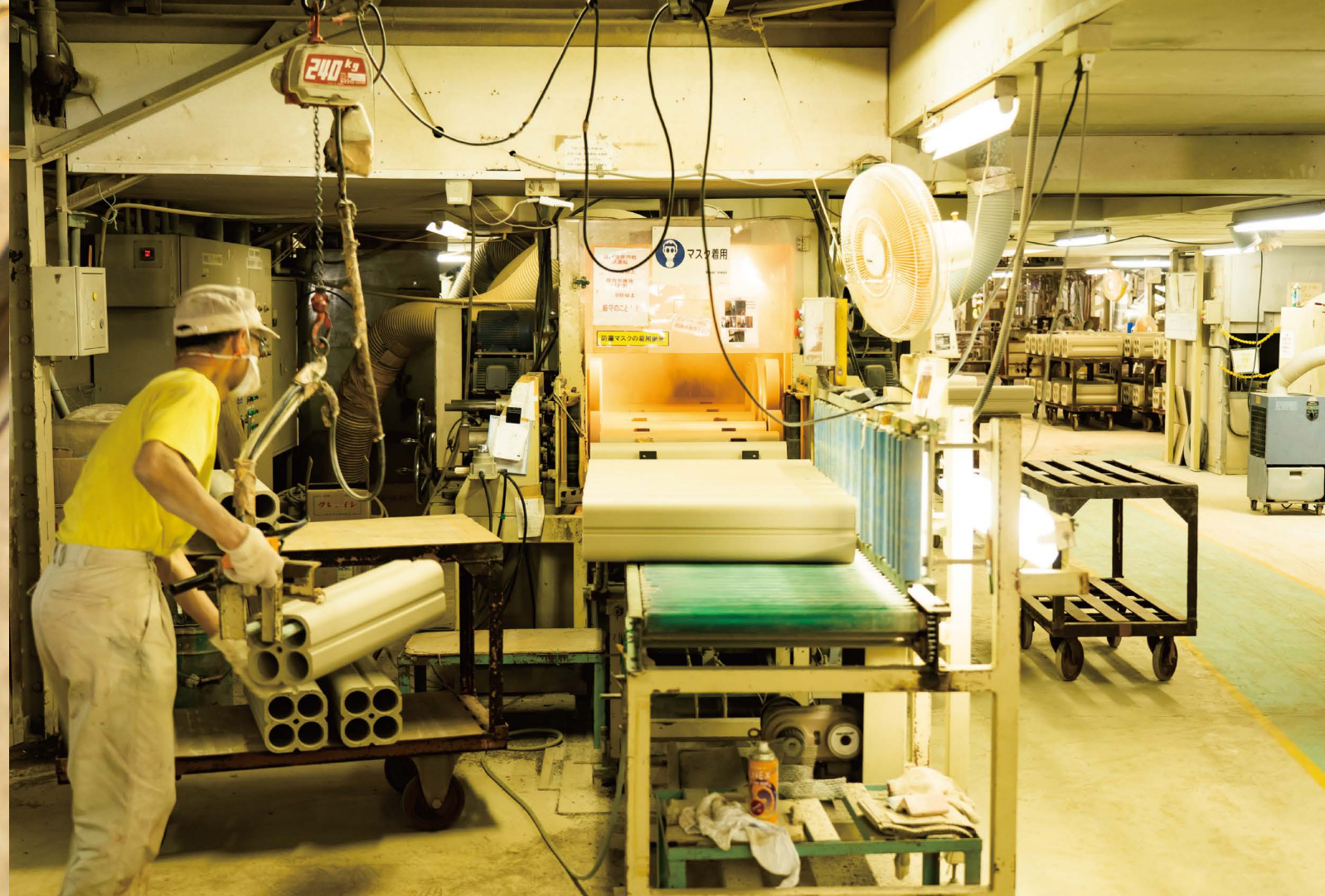
こんなすごい建物を常滑以外の町で建てられるだろうか？
常滑らしさ全開の昭和の知られざる名建築、
それが「電纜管ハウス」だ。
今回は所有者の厚意で特別に誌上公開しよう。

あの陶製品が建物に!?

その建物は常滑市多屋にある。新旧の住宅が混在する町の中で、三階建ての高さに相当する建物が放つ異彩は強烈だ。ただ、立地が旧国道(県道252号)の大和橋西交差点から少し奥に入った目立たない場所なので、多屋の人以外にはほとんど知られてこなかったのではないだろうか。

全体を包む濃い赤茶の「土管色」壁に入った筋のような模様、コンクリートの枠。見たことのない建物の存在感に、思わず目が釘づけになる。近づいてみると、この建物がなんらかの陶製品を積み上げてできていることがわかる。いかにも堅牢そうなのだが、どことなく子供がブロック遊びで作る家も思わせ、なんともユニークだ。

壁に使われている陶製品は、実は常滑の人には馴染み深いものだ。それは、断面にいくつもの穴が開いた直方体。町のあちこちで、土留め、建物の土台、塀、ベンチ、車止め、やきもののオブジェが置かれる台座、



傘立てなどとして使われているのをよく見かける。しかし、それは本来の用途ではなく、出荷できなかったアウトレット品を転用したにすぎない。頻繁に目にする割に名前はまだあまり知られていないこの製品は「電線管」といい、通常は地中に埋めて使うものである。

この建物には正式な施設名称もこれといった愛称もないので、とりあえず「電線管ハウス」と呼んでおこう。所有者は、杉江製陶株式会社の前社長で現在は相談役を務める杉江省一郎さん。杉江製陶は檜原大池のほとりにあり、常滑で唯一の、いや世界でもおそらく唯一の陶製電線管の専門メーカーだ。そして、これを建てたのは杉江製陶の先々代社長で、明治三十七年（一九〇四）生まれの杉江伍二である。

杉江製陶とはどのような会社で、そもそも電線管とはいったい何なのだろうか。

電線管とはじめ

杉江製陶は明治三十九年（一九

一八九九）に、現在は外装タイルのメーカーとして知られる陶榮が京都電話局からの依頼により製造したものが嚆矢とされ、当初は「陶製電話単孔管」とか単に「電話管」などと呼んでいた。年を追って電話が普及していくのに伴い、半陶管や電話管の需要も拡大し、常滑の多くの製陶所が手掛けるようになった。竹次郎が杉江製陶を興したのは、まさにその頃である。

そのうち、複数の穴を持つ「多孔管」が開発され、電話線だけでなく、埋設電線の保護にも使われるようになった。そこで、ケーブル全般を意味する「電線」という言葉を用いた「電線管」という名称が創出されたと思われる。

大正時代には伊奈製陶（現LIXIL）も電線管の製造に乗り出し、電線管と半陶管は常滑を代表する陶製品のひとつに成長した。注文が全国から常滑に押し寄せ、杉江製陶もフル稼働だったことだろう。大きな納品先としては、豊川海軍工廠などの軍施設もあった。

戦後は、最大手の伊奈製陶が電

〇六）に多屋の杉江竹次郎が創業した。現存の製陶所では常滑きつての老舗製陶所である。主力製品は「角型半陶管」という土管の一種。簡単にいうとコの字型の土管で、半円や三角形もあった。筒状の土管に対して、「土樋」「半径土管」「半径管」とも呼ばれた。

半陶管は明治十五年（一八八二）常滑の鯉江常之助が東京の松井総兵衛という人の依頼を受けて作ったのがはじまり。当初は主に下水の側溝などに使われたが、明治後半に都市部で電話が引かれるようになると、地下に埋設する電話線の保護用としても利用されるようになった。

これとは別に、常滑では最初から電話線用として開発された小口径の土管もあった。明治三十二年



杉江製陶の刻印が入った角型半陶管

線管から撤退し、衛生陶器やタイルにシフトしていった。しかし、電線管が世の中で必要とされなくなったわけではない。そこで電線管製造に名乗りを上げたのが杉江製陶だ。穴の多い電線管は土管よりも製造に手間がかかり、それなりの規模の製陶所でなくては量産できない。だが杉江製陶は、あえて電線管製造に特化しようと考えたのだ。その挑戦は、将来的に市場拡大が見込めるといふ展望あつてのことだろう。

杉江製陶は昭和二十三年（一九四八）に株式会社組織変更し、社長に竹次郎の長男伍二が就任すると、量産と開発の体制強化に着手する。昭和二十六年（一九五二）には電線管どうしをボルトで繋いで外れにくくした、画期的な製品を考案。その性能を認めた名古屋の電電公社が採用し、これが会社発展の礎となった。

電線管ハウスが建てられたのは、杉江製陶が電線管メーカーとして走り始めて間もない昭和三十年（一九五五）ごろのことである。



三階サロ、ごようこそ

電纜管ハウスを建てたのは伍一だと先に書いたが、単に建築を業者に依頼したというだけではなく、伍一自身が設計をしている。窯屋に生まれ育った伍一は建築の知識をほとんど持ち合わせていなかったが、ものづくりに携わる人ならではのセンスが備わっていたのだろう。

建築方法は、鉄筋を立てて電纜管の穴にそれを通し、それをコンクリートで固めて、徐々に積み上げていくというシンプルなもの。自社の余剰品である電纜管の代金を加算しなければ、当時の金額で百万円ほどの費用でできたのではないかと省一郎さんは話す。完成までおよそ一年を要した。

では、電纜管ハウスの中を見てみよう。

建物の二階部分までは倉庫になつている。昔は製品の保管場所として使われ、今は家財道具などが置かれている。そもそも杉江家ではこの建物を「蔵」と呼ぶそうで、

色の化粧タイルがなんともモダンである。北東の隅にはマントルピースに似せた据え付けの飾り台もある。窯道具を組み合わせたもので、これも実に渋い風合い。その上には、六十一歳の伍一の陶像が置かれている。

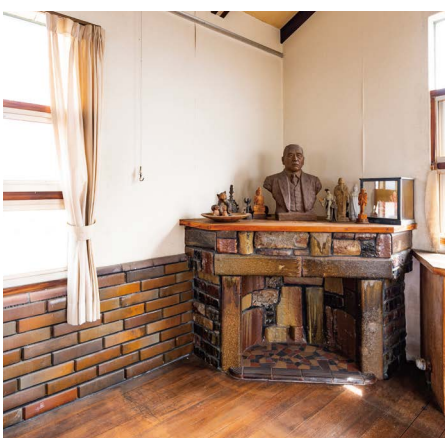
省一郎さんによると、この部屋は主にサロンとして利用され、伍一と親交のある窯屋の旦那衆や陶芸家たちがよく集まっていたという。集いながらも盛んだったのは、常滑が日本を代表する窯業地として活気に満ちていた高度成長期のこと。常滑を支えた錚々たる面々が、この部屋で歓談に興じ、時には談論風発したことだろう。そんな情景を想像すると、不意に当時の熱が蘇ってくるようだ。

電纜管ハウスは当時の多屋でもっとも高さのある建物だった。今ほど民家も建て込んでいなかったのに、南には林立する窯屋の煙突が、西には松林と伊勢湾が見えたと省一郎さんは振り返る。その眺望も、来訪者に特別感を味わわせたことだろう。

なるほど、言われてみれば確かに外観からして土蔵のようにどっしりとしている。

しかし、外付けの階段で三階に上がると、そこには蔵らしさが微塵もなかった。南半分はタイル張りのテラス的な空間で、三つの大きな龍巻の鉢が何個か置かれ、観葉植物が葉を茂らせている。伍一の夫人の趣味でもっとたくさん植物を育てていたこともあったそうので、一時は植物園の温室さながらだったと省一郎さんは話す。

ガラス戸で仕切られた北半分は板張りで、こちらは広い応接間といった雰囲気だ。急傾斜の天井と、壁の下部に巡らした厚手で濃い茶



日本を地中から支えているもの

電纜管ハウスの完成から程なくして、杉江製陶の業績が飛躍的に伸びるきっかけが訪れる。それは、昭和三十三年（一九五八）に開通した国道2号の関門トンネル工事に製品を納品したことである。

山口県と福岡県を海底で結ぶこのトンネルには、何種類かのケーブルが通された。電気ケーブルを敷設した建設省はその保護用に鉄筋コンクリート製ヒューム管を採用したのに対し、通信ケーブルを敷設した電電公社は、名古屋での使用実績もあつて杉江製陶の陶製電纜管を採用する。これを見た建設省の技官は、狭いトンネル内ではヒューム管よりも陶製電纜管の方が設置が容易で、火災にも強いことに注目した。

折しも名神高速の工事が始まるうとしていた矢先のこと。建設省は、名神のトンネルに陶製電纜管を使うことを決める。その特性は高く評価され、以後、高速道路では陶製電纜管を使うことが定着した。

さらには国道、国鉄、地下鉄、空港、
基地、ダム、大工場、土地開発の現
場など国内外のさまざまな場所に
杉江製陶の製品が使われ、会社も
用途や埋設する場所、ケーブルの種
類の増加などに応じて多種多様な
製品を開発してきた。

今に至っても変わることなく必
要とされ続けており、近年も名古屋
屋市営地下鉄、名一環、新東名、セ
ントレア、電線の地中化工事を実
施した自治体など、設置事例は枚
挙にとまがない。高い強度、施工
の容易さ、そして鋼管などと比べる
と安価であることを強みに、文字
どおり「縁の下の力持ち」として日
本のインフラを支えてきたのであ
る。近年は海外の国際空港でも使
われており、今後ますます海外に
も広まっていくだろう。

杉江伍一は常滑の電纜管のいわ
ば「中興の祖」であり、彼が建てた
電纜管ハウスは一種の記念碑と見
立てることができる。後世に伝え
ていきたい、貴重な遺産である。



昭和の常滑の熱気を
名建築が今に伝えてくれる。